



11月24日(木)～2023年5月27日(土)

第13回企画展 「極秘防諜機関『ヤマ機関』と登戸研究所

—日本陸軍の防諜とは ゾルゲ事件80年— 開催!

2022年
は、戦前における最も著名なスパイ事件といわれるゾルゲ事件が公表されてから80年目にあたりま

公開期間終了
のため削除

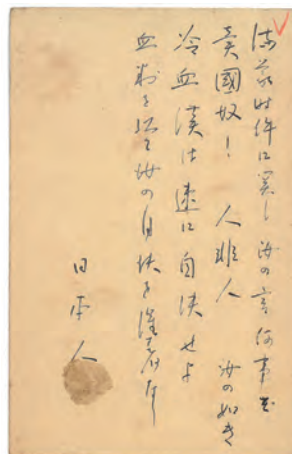


ゾルゲ機関の中心人物であるロシア系ドイツ人リヒャルト・ゾルゲ(国立国会図書館所蔵、太田耐造関連資料206「所謂国際諜報団事件に関する上奏案」より)

は、登戸研究所が担う秘密戦(諜報・防諜・謀略・宣伝)の4大項目のうちの一つであり、研究所では防諜のため、主に憲兵が使用する器材の研究開発が行われていました。防諜は1936年に勃発した2.26事件以降陸軍が力を入れ始め、1937年春には極秘防諜機関「ヤマ機関」が発足します。「ヤマ機関」は陸軍科学研究所秘密戦資材室(登戸研究所の前身)と協働し、防諜体制を整備・実行していきます。1937年の軍機保護法改定、1941年の治安維持法改定、国防保安法制定を経て、国は老若男女問わず国民に広く防諜意識を植え付けるため、1941年春より全国一斉防諜キャンペーン「防諜週間」を実施します。今回の企画展では、各種防諜キャンペーンを通じ、「スパイ」という見えざる敵に対する恐怖感を国民に植



マッチラベル。防諜キャンペーンとしてさまざまな標語、デザインのグッズやポスターが作られた。(当館所蔵)



1932年1月27日消印の横田宛てハガキ。差出人は匿名で「日本人」とある。血判とともに「賣國奴」「人非人」「自決せよ」といった文言が並ぶ。(当館所蔵)

え付け、不平不満や反戦を口にするものは「スパイ」協力者だと疑うようにしむけ、隣近所で互いに監視しあうシステムを作り上げていった過程を当時の資料より読み取ります。

また、防諜の前段階として国際法学者・横田喜三郎資料を紹介します。1931年満州事変を契機に日本社会が国家主義に傾斜する中で、国際連盟による平和的解決の必要性を横田は訴えました。しかし国際連盟の介入は不当であり日本は国際連盟を脱退すべしとの声が大きくなっていく中で、横田のような立場を取る「異端分子」は「非国民」として排除され圧力がかかっていく過程が横田資料からは伺えます。

■ 関連イベント

3年ぶりに対面式開催となる講演会「ゾルゲ事件を通じて見えてくる近衛体制の弱体化と東条体制の強化」(講師：山田朗館長)を2022年12月3日(土)14時開催のほか、企画展解説会を12月17日(土)14時、2023年2月25日(土)・3月11日(土)13時に開催します(いずれも要事前予約)。また2023年春にはゾルゲ事件研究第一人者を講師に迎えた講演会も予定しております。詳細・お申し込みは当館までお問い合わせいただくか当館WEBサイト内企画展特設ページ(10月中旬公開)をご覧ください。(塚本記)



オンラインシンポジウム 「戦争を伝える」ということ 開催レポート

7月30日(土)、初めての試みとして、オンラインシンポジウム『「戦争を伝える」ということ』を開催しました。主に若手教員の皆さんや教員を目指す学生の方を対象に、歴史・平和教育の大ベテランである渡辺賢二氏(当館展示専門委員・元法政第二高校教諭)、川口重雄氏(前・田園調布学園中等部・高等部社会科・地歴科教諭)、橋本暁氏(和光中学校・高校校長・社会科教諭)が登壇されました。各先生方の講演、パネルディスカッション、質疑応答と充実した2時間でした。

戦争体験者から直接話を聞く機会がなくなりつつある昨今、ますます難しくなる「戦争について教える」ことについて現場での不安を抱える先生方も多いと言われています。例えば、教科書や教室で行う授業だけでは政治史として伝えることになりがちな戦争の歴史を、どうしたら血の通ったことがらとして伝えられるのか、という若手教員の方からの問いに対しては、先生方の、フィールドワークに基づいた深い洞察から生まれた具体的なヒントが提示されました。教職を取り巻く環境は制約が多いと言われて久しいですが、教える側の熱意、バイタリティー溢れる活動やスタイルが、今後も許容され、継承できさえすれば、多くの民衆の血と涙が流れた近代戦争が持つ恐ろしさはその熱量をもって次世代に伝えられるということを今回のシンポジウムで確信しました。



撮影・東京新聞 安藤恭子氏

シンポジウムを録画した YouTube 動画も公開を開始しました。先生方へ寄せられた質問回答集と併せて当館 HP よりご覧いただけますので、今日からでも教育現場で活用いただけること請け合いです。

https://www.meiji.ac.jp/noborito/event/onlinesymposium_index.html

書き起こしは次号の館報第9号(2023年9月発行予定、当館HPでも閲覧可)に掲載予定です。どうぞお楽しみに!

シンポジウムの記録は
▶こちらのQRコード
からもアクセスできます



資料館見学に際しての制限緩和 について

登戸研究所資料館も、少しずつですが、コロナ前の状況に戻りつつあります。本年度、8月に実施されたオープンキャンパスも要事前申込・定員制でありながらも実際にキャンパスに来場者をお迎えし、3年ぶりに来場者の活気で溢れていました。当館も登戸研究所史跡スタンプラリーや館内展示室のミニガイドツアーを実施、2日間で約200名にご来館いただきました。

10月からは、当館も、p.4のお知らせのとおり、見学に際しての規制を徐々に緩和します。

1) 10名に減員しますが当館主催見学会を再開します。2) 学内の史跡巡りも大学教職員の案内で見学が


再開されます。3) 講演会などのイベントも学内会場へお客様を入れて、対面形式を併用して開催します。

新型コロナウイルス感染症は未だ完全な収束が見込まれませんが、当館も、来館者の皆様の感染予防を第一に、現実的に可能な部分は注意をしつつ制限を緩め、実りある資料館見学をしていただけるよう努めてまいります。

そこで皆様には引き続きお願いです。ご来館の際には、マスクの着用、手指のアルコール消毒、検温へのご協力をお願いいたします。

(このページ椎名記)



資料館の非公式看板猫ふみふみちゃん（以下㊟）が、渡辺賢二先生（以下㊠）から、四半世紀以上にわたる調査の秘話を聞くコーナーです。

- ㊟「今度の企画展はスパイだとか極秘機関だとかなんだかどきどきする名前がいっぱい登場するのね。それにしても『ヤマ機関』っていったいなに？」
- ㊠「憲兵や特高警察が表立って行えない極秘の任務を任されていた機関なんです。当初は電話の盗聴や郵便物の開封などを通じて外国公館などを監視して、怪しい人物の情報を憲兵や特高警察に伝えていました。ヤマ機関は逮捕はできないのですね。」
- ㊟「そんなことが行われていたなんて！！登戸研究所も関係していたって聞いたんだけど本当？」
- ㊠「はい。後に登戸研究所となる陸軍科学研究所秘密戦資材室が協力していたんですよ」
- ㊟「どんなことをしていたの？」
- ㊠「郵便物を相手にバレないように開封してまた封をする方法を教えたり、そのための道具を開発した

り。電話盗聴のためのレコーダーも開発しましたし、スパイの無線がどの場所から発信されているか調べる無線探知機も開発していましたね」

- ㊟「なるほど、緊密な関係だったのね。そういえば、先生はさっき『当初は』って言っていたわね？それが気になっていて...何か変わったのかしら？」
- ㊠「ふみふみちゃん、鋭いですね。その通りです。当初は外国のスパイ活動を防ぐ目的で活動していたのですが、徐々に権力に利用されるようになり、監視の対象が権力に反対の立場をとる人たちに向くようになるんですよ」
- ㊟「わあ・・・ぞわぞわしちゃった」
- ㊠「そうですね。防諜というのは外国に対するものと思っていたら、いつの間にか内側も対象になっていたということですね」（第九回 おわり）（塚本記）

シリーズ Q&A

第十九回 中国で見つかった、偽札に押されたスタンプの謎

今回は、今年の5月に寄贈された、両面に赤いスタンプが押されている蔣介石政権の法幣「交通銀行10元券」を紹介します。両面とも同じスタンプで、四角枠に「套碼壞票」（トウマーカイヒョウ）と書かれています。套碼 = 同番号札，壞票 = 印刷ミス，エラー，という意味で、市場に流通していたところ同じ番号のお札が既に発行済とわかり、偽札と判断されたものと考えられます。このスタンプが押された古紙幣は現在の中国でも骨董市でよく出回っているそうで、この紙幣も、もとは古銭商の方が北京の骨董市で入手したもの。大変精巧にできており、製造技術が高く、折れもなく「古札仕上げ」（= 使用感を出さず加工）が施されていない未使用のものであるため、この紙幣は、登戸研究所が偽札の大量生産を本格化させる前に製造したものである可能性があります。というのも、作戦が本格的になると、偽札とばれないよう、まるでそれまで使用されてきたかのよ

うにしわや汚れの加工をする「古札仕上げ」を、登戸研究所が製造過程に追加したためです。

このお札も、他の法幣と並べて第4展示室で展示していますので、是非ご自身の目で確かめてみてください。

（椎名記）

写真（上から）表面、裏面、裏面スタンプの拡大図
スタンプは両面ともに右上に押されている。裏面は印影がより鮮明。枠内の右上から縦書きで「套碼壞票」と記されている。



資料館からのお知らせ

■ 登戸研究所保存の会・明治大学平和教育登戸研究所資料館共催 多摩区制 50 周年記念事業 講演会
「一登戸研究所の歴史と地域の歴史を振り返り、未来を見据える一日中戦争からウクライナ戦争を考える」

約 3 年ぶりに生田キャンパスで講演会を開催します！
(オンライン同時配信あり。)

2022 年 2 月に始まったウクライナ戦争（ロシアによるウクライナ侵攻）は、「ハイブリッド戦争」などとも呼ばれ極めて現代的な戦争です。しかし、歴史的に比較してみると、日本がかつ

て行なった日中戦争（1937～1945 年）と様々な点で類似しています。本講演では、講師の当館館長 山田朗（明治大学文学部教授）が登戸研究所が果たした役割を振り返り、ウクライナ戦争と日中戦争を比較検討しながら、両方の戦争の類似性と、戦争がもたらしつつある、またもたらした危険な状況を考えます。

<講演会概要>

日時：2022 年 10 月 22 日（土）13：30～15：30
会場：明治大学生田キャンパス中央校舎 6 階メディアホール、またはオンラインライブ配信（zoom ウェビナー利用）

定員：対面（会場）140 名、オンライン 400 名

※どちらも要事前予約、申し込み先着順

※お申し込みの際は、対面 / オンラインの別と、対面の方は参加者全員の氏名と代表者緊急連絡先・メールアドレスを、オンラインの方は氏名とメールアドレスをお知らせください。

9 月末現在、会場の残席が少なくなっております、



お申し込みはお早めをお願いいたします。

講演会はこの QR コードから
簡単にお申込できます▶



■ 復活します！資料館主催見学会

10 月より資料館主催見学会を再開します。コロナ下のため減員しているため、9 月末現在、12 月までの回は全て満員になっていますが、2023 年 1～3 月分も次のスケジュールでお申し込み受付中です。

- 1/21（土）13 時～山田 朗
- 1/28（土）13 時～渡辺賢二
- 2/18（土）13 時～渡辺賢二
- 2/25（土）10 時～渡辺賢二
- 3/11（土）10 時～渡辺賢二
- 3/25（土）13 時～山田 朗

※各日定員 10 名、所要時間約 2 時間 30 分（キャンパス内史跡巡り、ビデオ鑑賞、館内ガイド、質疑応答）

お申し込み要領：(1) 希望日前日 16 時までに下記当館連絡先にお申し込みください。受付時間は水 - 土曜 9-16 時、FAX・メール予約は当館からの返信をもって確定します。(2) 予約時には希望日時、参加者全員の氏名、代表者の緊急連絡先をお知らせください。※可能な限り第二希望もお知らせください。

※お名前がない方はキャンパスに入構できません

■ 生明祭期間 10 月 30 日（土）の事前予約について

この日に限り、当館の来館者の方も生田キャンパス入構時に「生明祭オンラインチケット」が別途必要です。詳細は当館へお問い合わせください。

(権名記)



編集・発行：明治大学平和教育登戸研究所資料館

発行日：2022 年 9 月 30 日

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1

明治大学生田キャンパス

TEL/FAX：044-934-7993 ✉ noborito@mics.meiji.ac.jp

Web サイト <http://www.meiji.ac.jp/noborito/index.html>

twitter @meiji_noborito

facebook <https://www.facebook.com/people/>

明治大学平和教育登戸研究所資料館 /100077822204861/

Instagram @meiji_noborito

2022 年 9 月 15 日現在の累計来館者数は 83,037 名です